

ベトナム漢喃研究院図書館所蔵の『日本維新列家慷慨詩』 および福田英子「致薛錦琴書」について

平塚 順良

一、はじめに

越南（ベトナム）の漢喃研究院図書館は、数多くの漢文文献を収蔵しており、越南における漢字文化の精華がここに集積されていると言える。またその蔵書の全貌は、『越南漢喃文献目録提要』中央研究院中国文哲研究所・二〇〇二年によって知ることができる。

この漢喃研究院図書館には、日本に関連する文献もいくつか所蔵されている。その中に、『日本維新列家慷慨詩』（配架番号:A.3100。以下、慷慨詩と略称する）と名付けられた鈔本がある。この慷慨詩については、いまだこれを対象とした研究は現れていないようである。今回は、この慷慨詩がどのような書物を参考にして編纂されたものであるのか、またどのような経緯で越南に伝わったものかを考えてみたい。

なお慷慨詩の末尾には、続けて「皇越地輿歌」「痴女伝」「致薛錦琴書」の三種の漢文が鈔写されている。この中でも注目に値するのは「致薛錦琴書」で、これは日本の自由民権運動活動家である福田英子が、上海の一少女薛錦琴に宛てた漢文書簡である。この書簡についても、どのような経緯で越南に伝わったのか検討をおこなうことにしたい。

慷慨詩がどうして越南に伝来したのか、それには漢字文化圏に属する越南・中国・日本の三国が密接に関わっている。この三国はそれぞれ異

なる言語を使用するものの、かつては漢詩文によって互いに交流することが可能であった。漢字文化圏の有するこうした漢詩文を通じた意思疎通の可能性が、慷慨詩の伝来には大きな役割を果たしていると言える。

二、慷慨詩について

慷慨詩は鈔本で、誰がいつごろ筆写したものかは不明である。明治維新期の総勢二十六名の漢詩文を収録する。煩瑣ではあるが、以下にその項目を列記してみることにはしたい。

- | | | | |
|----------------|--------------|--------------|---------------|
| (1) 佐久間象山先生傳 | (2) 藤田東湖先生傳 | (3) 蒲生君平先生傳 | (4) 高山彦九郎先生傳 |
| (5) 頼山陽先生傳 | (6) 頼三樹先生傳 | (7) 水戸齊昭公傳 | (8) 月照師列傳 |
| (9) 渡邊華山先生傳 | (10) 平野國臣先生傳 | (11) 堀織部先生傳 | (12) 武田耕雲齋先生傳 |
| (13) 雲井龍雄先生傳 | (14) 梁川星岩先生傳 | (15) 小原鐵心先生傳 | (16) 久版通武先生傳 |
| (17) 版本龍馬先生傳 | (18) 梅田雲濱先生傳 | (19) 橋本左内先生傳 | (20) 安積武貞先生傳 |
| (21) 日下部伊三次先生傳 | (22) 鶴飼父子合傳 | (23) 大橋順藏先生傳 | (24) 岩倉具視公傳 |
| (25) 木戸孝允公傳 | (26) 吉田松陰先生傳 | (27) 林子平先生傳 | |

「久坂通武」「版本龍馬」は、それぞれ正しくは「久坂通武」「坂本龍馬」である。これは伝播の過程で、坂を版に誤ったのだと考えられる。慷慨詩がどのような資料に基づいたのかを見極める上で、この点が重要な手掛かりのひとつになることは、後に論じたい。なお「版本龍馬先生伝」は項目のみが立てられており、漢詩文を載せない。

まずは、慷慨詩がどのような資料に基づいて編纂されたのかについて考えたい。慷慨詩のもとになったと思われる文献を、その始点にまで遡ってゆくと西村三郎編『近古慷慨家列伝』にたどり着く。西村三郎編『近古慷慨家列伝』は奥付によれば、春陽堂の出版にかかり、初編が明治十七年（西暦一八八四年）三月に出版御届、後に初編・二編・三編・四編の合本が明治十九年（一八八六）五月に御届とある。またさらには、瀬山佐吉が明治二十五年（一八九二）に出版した『近古慷慨家列伝』も存在する。

この西村三郎編『近古慷慨家列伝』は、佐久間象山先生伝に始まり、木戸孝允公之伝まで、明治維新期の総勢三十五名の伝記を載せる。この『近古慷慨家列伝』所収の各名人伝から、伝記人物の漢詩文のみを抜き出すと、漢喃研究院図書館所蔵の慷慨詩になるようである。

しかし、慷慨詩は、直接『近古慷慨家列伝』を参照して編纂されたものではないようだ。『近古慷慨家列伝』には漢訳が二種類存在する。ひとつは趙必振訳述『日本維新慷慨史』広智書局・光緒二十八年（一九〇二）で、もうひとつは『漢文台湾日日新報』に明治三十八年（一九〇五）九月十三日から明治三十九年二月二十一日まで連載された陳伯興「維新人物列伝」である^③。

ここまで四種のテキストを紹介したが、以下ではこれらを年表の形で整理しておくことにしたい。なおこれ以降は四種のテキストについて略称を用いて論述を進めるため、年表に略称をも併記することにした。

西暦	書名／題名	出版／掲載	言語	略称
一八八六	近古慷慨家列伝	春陽堂	日本語	春陽堂版
一八八七				
一八八八				
一八八九				
一八九〇				
一八九一				
一八九二	近古慷慨家列伝	瀬山佐吉	日本語	瀬山版
一八九三				
一八九四				
一八九五				
一八九六				
一八九七				
一八九八				
一八九九				
一九〇〇				
一九〇一				
一九〇二	日本維新慷慨史	広智書局	漢語	広智版
一九〇三				
一九〇四				
一九〇五				
一九〇六	維新人物列伝	漢文台湾日日新報	漢語	新報版

慷慨詩の編纂に当たっては、四種のテキストの中でも広智版が用いられたようである。その事実について具体例を挙げて検討する前に、まずは広智版が現れた時代背景について確認しておくことにしたい。

一八九五年に日清戦争が終結すると、和書の漢訳数は突如増加した。

譚汝謙の統計によれば^④、一八六八年から一八九五年の間に漢訳された和書は八件に過ぎなかった。これが一八九六年から一九一一年の間に九百五十八件へと急激に増加する。

中国では、日清戦争の敗戦を契機として、西学を学び近代化を目指そうとする気運が高まった。その際、直接西洋に留学生を送りまた洋書を漢訳するよりも、日本を通じて西学を受容し、近代化を図る方が得策だとする考えが現れた。その理由には、日本においてすでに取捨選択された西学の精髓のみを学んだほうが、近代化の近道であると考えられたことがまず挙げられる。また両国の距離が近いことや、日本語は文字に漢字を用いることから習得が容易であると考えられたことなどが挙げられる。こうして日清戦争後、清朝から多くの留学生が来日するとともに、多くの和書が漢訳されるに至ったのである。

一九〇二年に出版された広智版も、日清戦争後に数多く現れた和書の漢訳中の一本として位置付けられる。広智版は、本来中国の近代化に資するものとして、中国での受容を想定したものであった。しかし、後に論じるように実際にはその範囲を超え越南にまで伝来するに至ったようである。

さてそれでは本題に戻り、以下では具体的な例を三つ挙げて、慷慨詩は広智版を参考にして編まれたものであることを証明したい。

一つめは藤田東湖「和文天祥正氣歌（文天祥の正氣の歌に和す）」を例に挙げよう。ひとまず『東湖全集』博文館・一九四〇年を定本とみなし、その第九・十句を示すと、「凝爲百鍊鐵、銳利可斷鑿（凝りては百鍊の鉄と爲り、銳利鑿を断ずべし）」となっている。この二句の異同を以下一覽に示そう。

春陽堂版	凝爲百鍊鐵、銳利可斷鑿
瀨山版	減爲百鍊鐵、銳利可斷鑿
広智版	減爲百鍊鐵、銳斷離人頭
新報版 ^⑥	凝爲百鍊鐵、銳利可斷鑿
慷慨詩	減爲百鍊鐵、銳斷離人頭

第十句を「銳斷離人頭」とするのは、広智版と慷慨詩のみであり、このことは慷慨詩が広智版を参考にして筆写されたことを示している。^⑦

二つめは、吉田松陰の画賛を例に挙げたい。安政六年（一八五九）、門人の松浦松洞が描いた松陰像に、松陰自らが画賛をしたためたことがある。『吉田松陰全集』第一巻、岩波書店・一九四〇年では巻頭に収録されており、第八句を「身許家國兮生死吾久齊（身は家國に許し死生吾久しく齊しくす）」に作る。それでは各テキストがこの部分をどのように作っているのか見てみよう。

春陽堂版	身許家國兮生死吾奚疑
瀨山版	身許家國兮生死吾奚疑
広智版	身死國家兮生死吾奚疑
新報版 ^⑧	身許家國兮生死復奚猜
慷慨詩	身死國家兮生死吾奚疑

「身死國家」に作るのは、広智版と慷慨詩のみであり、これも慷慨詩が広智版を参照して編まれたことを示す。

最後に、坂本龍馬の項目名を見てみよう。

春陽堂版	坂本龍馬君ノ傳
瀬山版	坂本龍馬君ノ傳
広智版	坂本龍馬先生傳
新報版 ^⑨	坂本龍馬先生傳
慷慨詩	坂本龍馬先生傳

坂を版に誤るのは、広智版と慷慨詩のみであり、慷慨詩は明らかに広智版の誤りを襲っている。

以上、三例で検証したように慷慨詩は、広智版から伝記人物の漢詩文のみを抜き出し編纂されたものであると考えられる。^⑩

ここで広智版の漢訳者である趙必振について確認をしておこう。田伏隆「趙必振伝略」^⑪によれば、趙必振（一八七三～一九五六、字は曰生、別号は星庵、武陵県（現在の湖南省常德市）の人である。一九〇〇年に自立会運動に参加、常德で自立軍の組織に当たり、運動が失敗すると日本へと渡った。日本滞在中は、梁啓超が主編を務める漢語雑誌『清議報』の校正・編集などを担当し、『清議報』『新民叢報』に詩文を発表している。一九〇二年にはひそかに上海へ戻り、日本人の著作の漢訳を開始する。『二十世紀之怪物帝國主義』（幸徳秋水著）、『近世社会主義』（福井準造著）などの翻訳がある。

また広智書局は、梁啓超の主導によって立ち上げられた出版社であるが、梁啓超は日本亡命中の身の上であったため、発行人には馮鏡如の名が挙がっている。^⑫

三、福田英子「致薛錦琴書」について

先にもすでに述べたが、慷慨詩は、その末尾に福田英子の「致薛錦琴

書」を鈔写する。本章では、この書簡がどのような資料に基づいて鈔写されたのかを考えてみたい。

福田英子（一八六五～一九二七）は、日本の自由民権運動に身を投じた、女性解放運動の先駆者として知られ、特にその自叙伝『妾の半生涯』によって有名である。^⑬この福田英子が、十代の一女性薛錦琴に書簡をしたためるに至った経緯について、以下順を追って見ていくことにしたい。

劉巨才『中国近代婦女運動史』中国婦女出版社・一九八九年の第五章「辛亥革命前夕の婦女解放闘争」は、薛錦琴について以下のように記録する。

一九〇一年三月十五日、上海愛國人士集會於張園、主張「力拒俄約、以保危局」、開始了拒俄運動。二十四日、上海愛國人士第二次集會張園、商討拒俄辦法。上海婦女積極參加拒俄運動。當時、年僅十餘歲的女學生薛錦琴、慷慨陳說。

一九〇一年三月十五日、上海の愛國人士たちは張園において集會を開き、「努めてロシアとの条約を拒否し、危機的局面から身を守る」ことを主張し、反露運動を開始した。二十四日、上海の愛國人士たちは張園において第二回集會を開き、ロシアとの条約を拒否する方策を話し合った。上海の女性たちも積極的にこの反露運動に参加した。当時、わずか十数歳の女学生であった薛錦琴は、激越な口調で意見を述べた。

この時に薛錦琴が述べた内容について、中国では一九〇一年三月二十六日（旧曆二月初七日）の『字林西報』が英文で報道している。またその次の日、三月二十七日には『中外日報』が、『字林西報』の記事を漢訳したものを掲載している。^⑭

この薛錦琴の演説については、日本でも明治三十四年（一九〇一）四月

八日の『東京朝日新聞』が「支那のジャンダーク」という見出しでいち早く報道している。以下に一部を引用すると、

上海愛國會の演壇に紅涙を揮て悲壯の演説を爲したる少女薛錦琴は廣東人薛氏の女にして上海ミシヨナリー、スクールの教育を受け夙に芳名あり。

とある。また明治三十四年（一九〇二）四月十五日『婦女新聞』にも「少女慷慨演説」という見出しで、

去月二十五日上海張園内に於て開かれたる清國愛國同盟會にて數人の慷慨悲憤演説あり會衆皆涙を垂れて激昂せる折花の如き一少女人々を推しわけて演壇に馳せ上り涙を揮つて滔々演ずらく……

とあり、この後に薛錦琴の演説内容を紹介する。このように薛錦琴の演説は、日本にも伝えられ、福田英子の知るところとなつたようである。

福田英子が薛錦琴へ宛てた書簡は、まず漢文の公開状として発表された。光緒二十七年（一九〇二）五月一日『清議報』第八十二冊の来稿雜文に「致薛錦琴書」として掲載されている。続いて和文が『婦女新聞』に、明治三十四年（一九〇二）五月十三日・二十日の二回に分けて「薛錦琴女に與ふるの書」との題名で掲載されている^⑮。その前文によれば、

清國の少女慷慨家薛錦琴嬢の事は曾て掲げたりしが福田英子氏の遙かに之に寄せたる書は左の如し是は過日某新聞に出でたる由なれど社友より態々寄せられたれば掲ぐる事としぬ。

とある。「薛錦琴嬢の事は曾て掲げたり」とあるのは、先に引用した明治三十四年（一九〇二）四月十五日『婦女新聞』の記事を指す。また「過日某新聞に出でたる」と言うのは、『清議報』第八十二冊に掲載された漢文の公開状を指すと思われる。この福田英子「薛錦琴女に與ふるの書」の一節には、「妾は拙國新聞紙が清國のジャン、デ、アークとして貴女の壯志を傳ふるに遭へり^⑯」とあるので、福田英子は『東京朝日新聞』の「支那のジャンダーク」を読んで、この公開状をしたためたことが分かる。このように、福田英子が薛錦琴に宛てた公開状は、まず漢文が、その後和文が発表されたのである。

福田英子の執筆にかかる文章は、『福田英子集』不二出版・一九九八年に網羅されているが、その中に漢文で書かれたものはひとつも収録されていない。『清議報』第八十二冊に掲載された「致薛錦琴書」も、福田英子が自ら漢文でしたためたものではないだろう。『清議報』の校正・編集に当たっていた、趙必振かあるいはその他の編集者が漢訳したものであると考えられる。なお福田英子の公開状を薛錦琴が実際に目にしたかどうかは定かではない。

以上に論じてきたところから、慷慨詩の末尾に鈔写された福田英子「致薛錦琴書」は、『清議報』第八十二冊から抜き書きしたものであると考えられる。

ここで『清議報』について簡単にその概略を述べておくことにしたい。『清議報』は、梁啓超の主導により光緒二十四年（一八九八）十一月十一日に、日本の横浜で第一冊が発行された漢語雜誌である。梁啓超は日本に亡命中の身の上であったため、発行兼編輯人として馮鏡如の名が掲げられている。『清議報』は光緒二十七年（一九〇二）十一月十一日に第一冊の発行をもって停刊となるが、間もなく後続誌として『新民叢報』が光緒二十八年（一九〇二）正月一日に創刊されている^⑰。

続いて、福田英子「薛錦琴女に與ふるの書」の内容についても、ここで触れておくことにしたい。引用には、「致薛錦琴書」と「薛錦琴女に與ふるの書」の双方を対照して示すことにする。まず福田英子は西欧列強の東亜侵略に直面して、国家の強弱は何に存するかを論じ、

然歐洲民氣之所以常活潑不羈、東亞民氣之所以常銷沈不振者、蓋由有婦人爲其後援與否而已。……歐美之婦女、能以柔克剛、故其國民之元氣日臻雄偉。而東洋之婦女、反甘爲男子之翫弄物。吁、東洋之民氣不振、日瀕于衰亡腐壞之域得無故耶。

然らば西歐人の士氣斯の如く活潑にして、東洋人の士氣如此振はざるは、其故何ぞや。曰く是れ一つは婦人の後援あると否らざるとに由らずんばあらざるなり。……。婦女子の柔克く剛を制する歐人社會の元氣活潑にして、而して婦女子自ら男子の翫弄物たるを甘んずる東洋社會の衰亡に瀕するもの決して偶然にあらざるなり。

と述べ、女性の後援の有無が、国家の強弱として現前していることを説く。そこで、

若是、則西人直東人不共戴天之寇讎矣。今欲勝之、非鑑我之所短、師彼之所長不可。取彼之所長、以補吾不足、然後以吾之長制彼之所短。此勝敵之道也。而吾所短彼所長者、即有婦人爲之援于後與否而已。東方婦女當此機其亦知之否乎。

貴女よ、吾人が不俱戴天の仇敵、一つ西人ありて存するのみ。……。今ま我が東洋人にして此の敵に勝たんと欲せば、宜しく先づ之れを

我短所に鑑みて敵の長所を取り、然る後敵の短所を突くべきなり。而して敵の長にして私の短なるは、即ち婦人後援の有無にありとなさば、東洋婦人たるもの此機に當たり豈大覺悟なかるべけんや。

とあるように、西欧と対峙するためには、西欧の長所は見倣い取り入れるべきであり、特に女性の後援については模範とすべきであるとする。

福田英子は書簡の中で、国家の強弱は、女性の強弱に左右されることを主張する。このような観点は、梁啓超の女性論にも見られる。梁啓超をはじめとする清末民初の女性論については、須藤瑞代『中国「女権」概念の変容』研文出版・二〇〇七年が、すでに詳細な検討をおこなっている。須藤は、梁啓超の女性論を、第一期（一八九七～一九〇二）と第二期（一九〇二）に分ける。梁啓超の第一期女性論は、おもに『時務報』に掲載されているが、その中から梁啓超「变法通義・女学」の一節を引用すると、

是故女學最盛者、其國最強。不戰而屈人之兵、美是也。女學次盛者、其國次強、英法徳日本是也。〔時務報』第二十五冊）

ゆえに女学が最も盛んであれば、その国が最も強い。戦闘せずに敵兵を屈服させる、¹⁹⁾アメリカがこれである。女学が次いで盛んであれば、その国が次いで強い。イギリス・フランス・ドイツ・日本がこれである。

とあり、ここで梁啓超は女学の隆盛と国家の富強とを結び付けて論じている。須藤は、こうした思潮は、同時代の馬君武・金天翮などにも共通して見られることを指摘する。²⁰⁾

以上に述べたところから、一九〇〇年前後の日本・中国において、国

家の富強を目的に据えた、女権の拡張という思潮が共通して見られることが分かる。

四、広智版・『清議報』の越南への伝来について

これまでに論じたところにより、慷慨詩は、広智版から伝記人物の漢詩文のみを抜粋したものであり、また福田英子「致薛錦琴書」は『清議報』第八十二冊からの抜き書きであることが分かった。それでは、広智版・『清議報』が越南へと伝来していた事実は確認できるのだろうか。

梁啓超の著作や主編雑誌の越南への伝来に関しては、白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア』巖南堂書店・一九九三年の第三章「新書」―ベトナムと外部世界―に詳しい。以下では、この白石の論述によりつつ、広智版・『清議報』の越南への伝来について考えてみたい。

まず、越南から日本への留学運動（東遊運動）を主導した潘佩珠（Phan Bội Châu、一八六七―一九四〇）の『自判』年表第三紀²¹には、一九〇五年日本へと向かう船中のことを回想して、

余在國內、曾得讀戊戌政變中國魂及新民叢報兩三篇、皆爲梁啓超先生所著者。極敬慕其人。

わたしは越南国内で、かつて『戊戌政変』『中国魂』および『新民叢報』などの二三篇を読んだことがあり、それらはみな梁啓超先生が著わしたものだ。わたしはその人を大変に敬慕していた。

とある。『戊戌政変』とはすなわち梁啓超『戊戌政変記』を指す。潘佩珠のこの記述から、越南に梁啓超の著作が伝来していた事実を確認することができる。そして潘佩珠の記述には、『清議報』への言及は見られず、

後誌である『新民叢報』が挙げられている。

また、鄧搏鵬著・潘佩珠修訂『越南義烈士』振亜社・成泰戊午年（一九一八）²²は、反仏運動の中で一九〇六年から一九一六年の間に斃れた同志たちの伝記を漢詩文によって綴ったものである。その「曾公拔虎」には、

癸卯甲辰年間、日俄戦役、日本大勝。東亞風雲、勢且蓬勃。中華諸志士所著新書新報種種、間多輸入東京西貢者。公素多與華商熟、乃得讀之。

癸卯・甲辰年間（一九〇三―一九〇四）²³、日露戦争で日本は大勝した。東亜の風雲、その勢いやまさに勃興せんとしていた。中華の志士達の新思想を説いた書籍・新聞雑誌の様々なものが、ひそかに東京・西貢にも多く輸入されていた。曾公は平素から中華商人と懇意にしており、これらを手に入れて読んでいた。

とあり、具体的な書名は示されていないが、中華商人を通じて新思想を説いた漢語書籍・新聞雑誌が、越南国内に流入していたことが分かる。

また『Huỳnh Thúc Kháng tư truyện（黄叔沆自伝）』Anh Minh、一九六三年には、黄叔沆（一八七六―一九四七）²⁴が一九〇四年ごろを回想して、フエで『戊戌政変』『中国魂』『日本維新史』『新民叢報』を読んだと言う。白石はここに挙げられている『日本維新史』について、羅普訳『日本維新三十年史』広智書局・一九〇二年を指すとす。根拠として挙げるのは、一九〇七年に仏印当局が押収した書籍目録の中に『日本維新三十年史』が含まれていることである。

しかし、この『日本維新史』が、広智版（『日本維新慷慨史』）を指す可能性も、慷慨詩が漢喃研究院図書館に現存することから、完全には排除

できなのではないか。あるいは広智版と『日本維新三十年史』はともに越南へ伝来していたのかもしれない。

以上のように、広智版・『清議報』が越南に伝来していた確かな証拠を、文献から探し出すことはできないが、梁啓超の著作や『新民叢報』が越南に伝来していた事実は確認できる。後誌の『新民叢報』が越南に伝来しているということは、『清議報』も越南に伝来していたであろうことは想像に難くない。また広智書局が出版した『日本維新三十年史』が仏印当局によって一九〇七年に押収されていることから、同じく広智書局の出版にかかる広智版（『日本維新慷慨史』）が越南に伝来していたとしても不思議ではないだろう。

五、おわりに

慷慨詩を鈔写したのは、いったいどのような人物だったのか。詳しいことは知る由もないが、広智版をどのように読んだのかについては、ある程度知ることができる。鈔写者は、日本の維新慷慨家たちの生き様を描いた伝記の部分よりも、維新慷慨家たちが作った漢詩文に、より高い価値を見出した。だからこそ、伝記の中から、維新慷慨家たちの漢詩文のみを抜粋したわけである。

ちなみに広智版の凡例に、

書中所録詩歌甚夥、無關宏旨。然原書所有、不忍全棄、其詩則照原文備錄。

本書が収録する漢詩・和歌は非常に多いが、それらは本旨とは関係がない。しかし原著にあるものを、すべて削除してしまうのは忍びない。そこで漢詩は原文に従ってすべて収録することにした。

とあるように、漢訳者の趙必振は、日本漢詩には何ら価値を見出しておらず、その意図はこの書物を通じて明治維新の実情を伝え、中国の近代化に役立てることにこそあったと言える。

ところが、慷慨詩を鈔写した人物は、漢訳者の意図に反し、かえって日本漢詩に価値を見出している。こうした漢詩に重点を置いた読み方を、歴史的に説明しようとするれば、次のようなことが言えるのではないか。

清朝は、一八八五年にフランスと天津条約を結び、越南への宗主権を放棄する。それ以前の越南阮朝（一八〇二～一九四五）では、清朝への朝貢使節である如清使部を定期的に派遣していた。如清使部が、派遣先の清朝で漢詩の応酬を数多くおこなったことは、如清使部として派遣された阮朝文人たちの詩文集が、『越南漢文燕行文献集成』復旦大学出版社・二〇一〇年に輯められており、これをひもとくことによって分かる。また如清使部は、朝鮮から清朝へと派遣されてきた燕行使との間でも漢詩の応酬をおこなっている²⁰。このように越南文人たちは、国外における主要な交流手段として、漢詩の応酬を行っていたことが分かる。漢字文化圏においては、それぞれ言語を異にしながらも、漢詩の応酬によって交流をおこなうことが可能であった。

以上のような背景を踏まえた上で、もう一度慷慨詩について考えてみたい。鈔写者は、清朝との朝貢関係によって規定された、漢詩の応酬を通じて国外と交渉する世界観の中にいまだ留まっている。そして、帝国主義の侵略にいかに対峙するかという新たな問題意識はいまだ希薄であると言えるだろう。時代の大きな転換に対応しきれない越南文人の姿を、明治維新の実情を記した伝記部分を排除し、維新慷慨家たちの漢詩文のみを抜粋したその行為から垣間見ることが出来る。つまり、中国から届く新思想を、越南文人が旧思想に基づいて読んだ例として、慷慨詩の存在を捉えることが可能なのではないだろうか。しかし例えば潘佩珠が、

越南において梁啓超などの新思想に触れ、一九〇五年に來日を果たし、その後民族運動を展開するように、新思想は一部の越南知識人に徐々に浸透しつつあったことも確かである^②。

また福田英子「致薛錦琴書」が慷慨詩の末尾に鈔写されている意義についても考えてみよう。「清議報」の中から、福田英子「致薛錦琴書」を特に選り出し鈔写したということは、鈔写者がこれに特別な価値を見出したことを意味する。中国・日本で展開された女性論は、越南においてどの程度受容されたであろうか。Le Thi Nham Tuyét (黎氏壬雪)『ベトナム女性史』明石書店・二〇一〇年には、女性論の受容についての言及は見られない。「清議報」第四十七冊(一九〇〇年)には石川半山「論女権之漸盛」が、また『新民叢報』第七号(一九〇二)には馬君武「女士張竹君伝」、第二十三冊(一九〇二)には梁啓超「禁早婚議」が掲載されている。越南に、『清議報』『新民叢報』が伝来していたであろうことは、すでに論じた。そうするとこれらの女性論が、越南で読まれた可能性は十分に考えられる。漢語雑誌を通じた、越南における女性論の受容は、一九〇〇年前後の東アジアにおける女性解放運動を包括的に論じるのに当たって、検討に値するテーマであると言えるだろう。

注

- ① 漢喃研究院図書館が所蔵する日本関連の資料には、ほかに『日本見聞録』(配架番号: A1164)があり、五名の越南人が日本へ漂流した際の体験を記録する。この『日本見聞録』については、陳益源「回顧在韓国、日本と越南之間而起漂流事件」(『越南漢籍文獻述論』中華書局・二〇一一年)にすでに詳しい考察がある。また、Ngô Thế Long 「Một tài liệu cổ do người Việt Nam viết về Nhật Bản, cuốn Nhật Bản kiến văn lục」(『Tập chí Hán Nôm』一九九〇年第一期)は、『日本見聞録』を主な研究対象とするが、慷慨詩の存在についても言及する。

② 趙必振の訳業については、潘喜顔「晚清時期趙必振日書中訳貢獻」(『史学月刊』二〇〇九年十二期)がすでに論じている。

③ 陳伯輿「維新人物列伝」の掲載状況は、『漢文台湾日日新報』陳伯輿「維新人物列伝」一覽表(薛建蓉「重写的「詭」跡: 日治時期台湾報章雜誌の漢文歴史小説」秀威資訊科技股份有限公司・二〇一五年の附録表四)にまとめられている。

④ 譚汝謙「中日之間訳書事業的過去、現在与未来」表二(『中国訳日本書綜合目録』中文大学出版社・一九八〇年)

⑤ 実藤惠秀『中国人日本留学史』増補版、くろしお出版・一九七〇年の第一章第七節「日本留学の諸理由」

⑥ 『漢文台湾日日新報』明治三十八年十月四日「藤田東湖先生伝(六)」

⑦ 藤田東湖「文天祥の正気の歌に和す」は、第十二句までを、平水韻の平声尤韻によって押韻する。韻字は、州・秋・洲・儔・鏊・仇である。春陽堂版「瀨山版は、鏊を鏊に作るが、鏊は入声藥韻であるから、これでは韻が揃わない。広智版は、韻を揃えるため、恣意的に文字を改め、韻字に頭(平声尤韻)がくるようにしたものと考えられる。なお、新報版は、鏊を

鏊に作るが、鏊は平声蕭韻であるから、これでは韻が不揃いになる。

⑧ 『漢文台湾日日新報』明治三十八年十一月五日「吉田松陰先生伝(四)」

⑨ 『漢文台湾日日新報』明治三十九年一月二十日「坂本龍馬先生伝(一)」・一月二十一日「坂本龍馬先生伝(二)」・一月二十三日「坂本龍馬先生伝(三)」

⑩ 趙必振が漢訳に際して底本としたのは、春陽堂版ではなく、瀨山版であったと考えられる。それは例えば、藤田東湖「文天祥の正気の歌に和す」において、瀨山版は第九句を「減爲百鍊鍊」に作り、凝を減に誤るが、広智版はこの誤りを踏襲し「減爲百鍊鐵」とする点などから分かる。

⑪ 『常德県文史資料』第三輯、中国人民政治協商會議常德県委員会文史資料研究委員会・一九八七年

⑫ 張朋園「広智書局(1901-1915)——維新派文化事業機構之一」(『中央研究院近代史研究所集刊』第二期・一九七一年)

⑬ 福田英子の生卒年や経歴は、『福田英子集』不二出版・一九九八年の村田静子「評伝」による。

- ⑭ 『拒俄運動：1901-1905』中国社会科学出版社・一九七九年の第一編
一九〇一年「薛女子錦琴演説」による。
- ⑮ 『福田英子集』は、『婦女新聞』明治三十四年（一九〇二）五月十三日・二十日を基にして「薛錦琴女に與ふるの書」を収録するが、『清議報』第八十二冊掲載の「致薛錦琴書」については、言及がない。
- ⑯ 「致薛錦琴書」の該当部分には「繼檢閱敵國新聞紙、知令嬢爲中華之貞徳、壯志奇懷、表于吐屬」とある。
- ⑰ 葉再生『中国近代現代出版通史』第一卷、華文出版社・二〇〇二年の第六篇「從維新至革命」第二章「維新党人海外辦報刊」
- ⑱ 『中国「女権」概念の変容』第一章第二節「不纏足と女子教育・梁啓超の女性論」（二十八頁）によれば、梁啓超の第一期女性論に属するものは、「戒纏足会叙」（『時務報』第十六冊、一八九七年）、「記江西康女士」（『時務報』第二十一冊、一八九七年）、「変法通議・女学」（『時務報』第二十三・二十五冊、一八九七年）、「試辦不纏足会簡明章程」（『時務報』第二十五冊、一八九七年）、「倡設女学堂啓」（『時務報』第四十五冊、一八九七年）、「禁早婚議」（『新民叢報』第二十三冊、一九〇二年）などを挙げるこ
とができる。
- ⑲ 「不戦而屈人之兵」は、『孫子』謀攻篇「不戦而屈人之兵、善之善者也（戦わずして人の兵を屈するは、善の善なる者なり）」に基づく。
- ⑳ 『中国「女権」概念の変容』第二章「人権」を有する「国民の母」
- ㉑ 潘佩珠の生卒年は、西川寛生『ベトナム人名人物事典』暁印書館・二〇〇〇年による。
- ㉒ 内海三八郎『ヴェトナム独立運動家潘佩珠伝―日本・中国を駆け抜けた革命家の生涯―』芙蓉書房出版・一九九九年の潘佩珠「自判」本文
- ㉓ 『Phan Bội Châu toàn tập (潘佩珠全集)』第五冊『Nhà xuất bản Thuận Hóa (順化出版社)・二〇〇〇年
- ㉔ 日露戦争は、一九〇四年から一九〇五年の間であるが、ここでは原文に即して訳出する。
- ㉕ 白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア』第三章第一節（一三一頁）は、「新書」を定義して「従来の漢籍古典とは違って、中国や世界の現状を叙述し、さらには中国の直面している諸問題に関して、経世の方策を提議する内容のものであった」と言う。
- ㉖ 和訳には、後藤均平訳『越南義烈史』刀水書房・一九九三年を参考にした。
- ㉗ 黄叔沆の生卒年は、『ベトナム人名人物事典』による。
- ㉘ 羅普訳『日本維新三十年史』のアジアにおける受容については、佐藤厚「高山林次郎（樗牛）等著『明治三十年史』と近代アジア世界に与えた影響」（『専修人文論集』九十七号、専修大学学会・二〇一五年）に論じられている。
- ㉙ 阮朝如清使部と朝鮮燕行使との詩の応酬については、清水太郎「ベトナム使節と朝鮮使節の中国での邂逅（6）」（『周縁と中心の概念で読み解く東アジアの「越・韓・琉」…歴史学・考古学研究からの視座』関西大学文化交渉学教育研究拠点・二〇一二年）に詳しい。また朝鮮燕行使については、夫馬進『朝鮮燕行使と朝鮮通信使』名古屋大学出版部・二〇一五年に詳しい。
- ㉚ 潘佩珠の民族運動については、白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア』に詳しい。
- ㉛ 『中国「女権」概念の変容』は、一二二頁で石川半山「論女権之漸盛」に、一〇八頁で馬君武「女士張竹君伝」に、二十八頁で梁啓超「禁早婚議」に言及する。

本研究はJSPS科研費26870708の助成を受けたものである。

（本学経営学部非常勤講師）